最尤推定値の獨立性及びその自由度の關係に就いて (2)

坂元, 平八 統計數理研究所

https://hdl.handle.net/2324/12917

出版情報:統計数理研究. 2 (2), pp.24-27, 1949-01-20. Research Association of Statistical

Sciences バージョン: 権利関係: が群の性質

 $T_l T_h = T_{l+h} \quad (l, h > 0)$

があつて、これが一パラメーター群に捜張され、可測 な洗れを作るばあいを考える。

定理 8. "例 5 において,保測愛換系 $\{T_i; i>0\}$ がエルマード的であるための十分條件として

- (i) T₁ パェルゴード的で、μ' が (0, ∞) 上のLebesgue 測度に對して絕對連續であるばあい
- (ii) T_1 が廣義混合型のはあい(μ' は任意) (ii) のばあいには $\{T_i\}$ は廣義混合型系をなす"。

(證明) 安西廣忠氏の定理(紙上談話會誌)によれば、 T_1 がエルゴード的であれば、高々可附番個の l を除いて T_1 はすべてエルゴード的となり、 T_1 が廣 後聞合型であれば、すべての l に對して T_1 は廣義混

. 合型となる。この結果を §2の定理にあてはあればよい。

定理 8 は實際の定営過程にあてはめて考えると、面白いことであるように思われる。

彷徨エルゴード定理の遺張及び應用に関して、更に 適當な機會に述べたいと思うが、今回はこれまでにと めておく。

文 意

E Hopf [1], Ergodentheorie (Ergebnisse), Springer, Berlin, (1927).

吉田耕作[1], エルゴード諸定連,敷物會誌,15% 1 號 (1939).

S. Saks [1], Theory of the integral. Warsaw, (1937).

最尤推定値の獨立性及びその自由度の關係について(2)

坂 元 平 八

統計數理研究所

. (昭和 22 年 12 月 20 日受理)

(IV) 最尤指定値の確定性及びその自由度の關係 に就て(一般の場合)

次の様な有意性検定は正規同歸の理論でよく起る問題である($y=\mid x_1e_1, x_2e_1, \dots, x_Ke_1$), $\alpha=1, 2, \dots, n>k$ を分布法則が $N\left(\sum_{p=1}^K a_p x_p, e^2\right)$ なる母集團から取られた大いさ n の標本とするる。此の時 a_1, a_2, \dots, a_K が近何なる値をとるに関らず $a_{r+1}, a_{r+2}, \dots, a_K$ (r< K) が夫々ある特定の値 $a_{r+1}^0, a_{r+2}^0, \dots, a_K^0$ なる値を取るや否やといふ假設を検定したい場合である。この場合も第三節の如く

$$\mathfrak{P}=X\mathfrak{A}+\mathfrak{Z}$$

で示され、劉は同時分布法則が

$$\left(\frac{1}{V 2\pi^{\frac{3}{2}}}\right)^n \exp\left\{-\frac{1}{2\sigma^2}(\mathfrak{Y}-X\mathfrak{Y})^2\right\} d\mathfrak{Y}$$

で與へられる母集團よりの標本達と考へられる。今尤度函數を

$$P(\mathfrak{Y} \mid \mathfrak{A}, \sigma^2) = \frac{1}{(V_{2\pi}\sigma)^n} \exp\left\{-\frac{1}{2\sigma^2}(\mathfrak{Y} - X\mathfrak{Y})^2\right\}$$

と置く事にする。こゝに $\mathfrak{A}=(a_1,a_2,\cdots,a_K)$ とする。 Ω を $\sigma^2>0$, $-\infty< a_p<\infty$, $p=1,2\cdots\cdots,K$ なる (K+1) 次元の母数空間とし ω を $a_{r+1}=a_{r+1}^0$, $a_{r+2}=a_{r+2}^0$, $\cdots\cdots$, $a_K=a_K^0$ なる (K-r+1) 大元の Ω の 部分空間であるとする。然る時 H_0 が検定すべき假設であるとすれば H_0 は真の母数が Ω 空間の部分空間 ω の中に横はるといふ假説になる。 H_0 を検定する縁の尤度比 λ は

$$\lambda = \frac{\max_{n} P(\mathfrak{Y}; \mathfrak{A}, \sigma^{2})}{\max_{n} P(\mathfrak{Y}; \mathfrak{A}, \sigma^{2})}$$

で興へられる。今 λ の値を求めるに第三節と同機にして先づ最初に Ω 空間で $P(\mathfrak{Y})(\mathfrak{Y}, \mathfrak{o}^2)$ が、最大になる 母数 \mathfrak{A} 及び \mathfrak{o}^2 を計算すると

$$\mathfrak{A}=(X'X)^{-1}X'\mathfrak{J}, \ \hat{\mathfrak{A}}-\mathfrak{A}=(XX)^{-1}X'\mathfrak{J},$$

$$\hat{\sigma}^2$$
n= $\frac{1}{n}$ {(E - $X(X'X)^{-1}X$) 3, 3} でまる。

これより
$$P(\mathfrak{Y})$$
 \mathfrak{N} , $\hat{\sigma}^2$)= $\left(\frac{1}{\sqrt{2\pi}\,\hat{\sigma}_\Omega}\right)^n e^{-\frac{n}{2}}$ を得る。

亦同蒙に ω 空間で P(?) N, σ²) π 最大になる母

數 $\hat{\mathfrak{N}}_1^*=(\hat{c}_1,\hat{c}_2,\cdots,\hat{c}_r)$, ϕ_{w^2} を次の機な手頂で求める。

今 $\mathfrak{N}=(\mathfrak{N}_1, \mathfrak{N}_2), X=(X_1, X_2)$ と置く 但し

$$\mathfrak{A}_1 = (a_1, a_2, \dots, a_r), \, \mathfrak{A}_2^0 = (a_{r+1}^0, a_{r+2}^0, \dots, a_K^0)$$

$$X_{1} = \begin{pmatrix} x_{11} & x_{12} & \dots & x_{1r} \\ x_{21} & x_{22} & \dots & x_{2r} \\ \dots & \dots & \dots \\ x_{n1} & x_{n2} & \dots & x_{nr} \end{pmatrix} \qquad X_{2} = \begin{pmatrix} x_{1r+1} & \dots & x_{1K} \\ x_{2r+1} & \dots & x_{2K} \\ \dots & \dots & \dots \\ x_{nr+1} & \dots & x_{nK} \end{pmatrix}$$

とする。然る時,
$$\mathfrak{Y}=(X_1,X_2)(\mathfrak{A}_1,\mathfrak{A}_2^0)+3$$

= $(X_1\mathfrak{A}_1+X_2\mathfrak{A}_2^0)+3$

依てこの関係から a_1 , a_2 ,, a_r , 及び σ^1 の最尤推 定値 $\hat{\Omega}_1^*$, σ^{ω^2} を求めるには文の方程式を解けばよい。 $X_1'\{\mathfrak{N}_1-(X_1\hat{\mathfrak{N}}_1^*++X_2\hat{\mathfrak{N}}_2^0)\}=0$

$$X_{1}^{\prime}(y) - (X_{1} y_{1}^{\prime} + X_{2} y_{2}^{\prime})) = 0$$

$$\mathfrak{E}_{w^{2}} = \frac{1}{n} \{ y_{1} - X_{1} \hat{y}_{1}^{\prime} - X_{2} y_{2}^{\prime} \}^{2} \quad \text{T55}.$$

 $-X_2 \mathfrak{N}_2 \mathfrak{O}] - \mathfrak{N}_1$

これを解くと $\hat{y}_1 *= (X_1'X_1)^{-1}X_1'(\hat{y} - X_2\hat{y}_2^0)$

$$= (X_1'X_1)^{-1}X_1' \mathcal{B}$$

$$\sigma \omega^2 = \frac{1}{n} \{ \mathfrak{D} - X_1 \mathfrak{A}_1^* - X_2 \mathfrak{A}_2^0,^2$$

$$= \frac{1}{n} \{ X_1 \mathfrak{A}_1 + X_2 \mathfrak{A}_2^0 + \mathcal{B} - X_1 \mathfrak{A}_1^* - X_2 \mathfrak{A}_2^0,^2$$

$$= \frac{1}{n} \mathcal{B} - X_1 (\mathfrak{D}_1^* - \mathfrak{A}_1) \}^2$$

$$= \frac{1}{n} \{ \mathcal{B} - X_1 (X_1' X_1)^{-1} X_1' \mathcal{B} \}^2$$

$$= \frac{1}{n} \{ (E - X_1 (X_1' X_1)^{-1} X_1' (\mathcal{B}_1, \mathcal{B}_1) \}^2$$

此の n.*, 📞 を P(2) (2,0°) に代入すると

 $\max_{\omega} P(\mathfrak{Y} \mid \mathfrak{A}, \sigma^2) = \left(\frac{1}{\sqrt{2\pi \mathfrak{F}_{\omega}}}\right)^{\frac{n}{2}} e^{-\frac{n}{2}}$ を得る。

從つて
$$\lambda = \left(\frac{\hat{\sigma}_{\Omega^2}}{\hat{\sigma}_{m^2}}\right)^{n/2}$$

数
$$q_1 = \frac{n \dot{\sigma}_{\Omega}^2}{\sigma^2}$$
, $q_2 = \frac{n(\dot{\sigma}_{\omega}^2 - \dot{\sigma}_{\Omega_2})}{\sigma^2}$ と置くと
$$\lambda = \left(\frac{q_1}{q_2 + q_1}\right)^{n,2} = \left(\frac{1}{1 + q_2/q_1}\right)^{n,2}$$
 である。

此處に $g_2 \ge 0$ なることは明らかである。以下若し假設 H_0 が真であれば g_1 と g_2 は獨立で夫々自由度 n-r, K-r の χ^2 分布に從ふことを示さう。先づ e^{-2} 及び $\widehat{\mathfrak{A}}-\mathfrak{A}$ は第三節に於ける (1) から (5) までの性質を

そのまょ満足する事は云ふまでもなからう。亦 $\sigma \omega^2$ 及 $\mathcal{N}_1 * - \mathcal{N}_1$ に就いては殆んど同様な事が云はれる。たい $\mathcal{N}_1 * - \mathcal{N}_1$ の分散行列は $(X_1'X_1)^{-1}\sigma^2$ で與へられ $(X_1'X_1)$ の浩藪は r で與へられるから $\{X_1(\mathcal{N}_1 * - \mathcal{N}_1)\}^2\sigma^2$ は自由度 r の χ^2 分布をなし、 $\eta \sigma \omega^2/\sigma^2$ は自由度 $\eta \sigma \gamma^2$ 分布をなし、 $\eta \sigma \omega^2/\sigma^2$ は自由度 $\eta \sigma \gamma^2$ 分布に從ふことが云へる。

扨 $g_1=n\hat{\delta}^2r/\sigma^2$ と $g_2=n(\hat{\delta}^2\omega-\hat{\delta}\Omega^2)/\sigma^2$ の獨立性を證明しよう。

先づ $X'(\mathfrak{Y}-X\mathfrak{Y})=0$ であるから, $X'\{\mathfrak{Z}-X(\mathfrak{Y}-X\mathfrak{Y})=0\}=0$ が成立する。 従って $X'(E-X(X'X)^{-1}X')\mathfrak{Z}\}=0$ が成立する。 従って $X'(E-X(X'X)^{-1}X')=0$ なることが云へる。 これより $X_1'(E-X(X'X)^{-1}X')=0$ が成立する。故 に $X_1(X_1'X_1)^{-1}X_1'=X_1(X_1'X_1)^{-1}X_1'X(X'X)^{-1}X'$, 此の關係式を用いれば g_1 の係數行列が $(E-X(X'X)^{-1}X')$, g_2 の係數行列が $\{X(X'X)^{-1}X'-X_1(X_1'X_1)^{-1}X_1'\}$ で與へられるか

$$\begin{aligned} & \{ X(X'X)^{-1}X' - X_1(X_1'X_1)^{-1}X_1' \} \\ & \times (E - X(X'X)^{-1}X') \\ & = X(X'X)^{-1}X' - X(X'X)^{-1}X'X(X'X)^{-1}X' \\ & - X_1(X_1'X_1)^{-1}X_1' \\ & - X_1(X_1'X_1)^{-1}X_1'X(X'X)^{-1}X' = 0 \end{aligned}$$

故に [定理 I] に依て g_1 と g_2 は獨立である。亦 g_1 は自由度 (n-k) の χ^2 分布をなし,亦 $g_1+g_2=n^2\omega^2$ は自由度 (n-r) の χ^2 分布をなすから [定理 III] に 依り g_2 は自由度 (n-r)-(n-k)=k-r の χ^2 分布をなす事を知る。

最後に特に $X_2'X_1=0$ ならば $X'X=(X_1,X_2)$ (X_1,X_2) $=\left(\frac{X_1'X_1}{X_2'X_1}\frac{X_1'X_2}{X_2'X_2}\right)=\left(\frac{X_1'X_1}{0}\left|\frac{0}{X_2'X_2}\right)$ であるから \mathfrak{A} 一 \mathfrak{A} の分散行列は

$$(X'X)^{-1} = \left(\frac{(X_1'X_1)^{-1}}{0} \middle| \frac{0}{(X_2'X_2)^{-1}} \right)$$
 従って $\mathfrak{A}_1 - \mathfrak{A}_1$ と $\mathfrak{A}_2 - \mathfrak{A}_2$ とは発立である。亦 $X(X'X)^{-1}X'$

$$= \left(\frac{X_i(X_i'X_1)^{-1}X_i'}{0} \frac{0}{X_i(X_i'X_2)^{-1}X_i'} \right)$$
 これより $\hat{\mathfrak{N}}_i^* - \hat{\mathfrak{N}}_i = \mathfrak{N}_i - \mathfrak{N}_i$ なる事が云はれ $\hat{\mathfrak{N}}_i^*$ $- \mathfrak{N}_i$ と $\mathfrak{N}_i - \mathfrak{N}_i$ とか経立なる事が云はれる。

V. 管脇計書法に於ける制定條件

本節に於ては Wilks の著書の p. 171-173 に於て取扱はれてゐる一般的な判定條件について論じよう。 次の檢定法は亂塊法, ラテン方格法等に於てよく起る 問題で多くは此の形式の檢定に持つて行く事が出來る。 今(y_a z_{1a} , z_{2a} , \dots , z_{5a}), a=1, 2, \dots , n > K を 分布法則が $\sum_{p=1}^{K} a_p x_p$, σ^2) なる母集から取れる大い z_n の標本とする。この場合假設 H_0 は次の際に云へる。

 ω : $\left\{ \begin{array}{ll} \textbf{上の予数空間} \ \Omega \ \ \text{ opt}$ で次の線な r_2 個の場立な條件式に依て條件づけられる。 $\left\{ \begin{array}{ll} X \\ \sum\limits_{p=1}^{K} C_{p,a_p}, \ v=1,\,2,\,\cdots\cdots r_2,\,r_1 < r_2 < K \\ p=1 \end{array} \right.$

$$C_{1} = \begin{pmatrix} C_{11} & \cdots & C_{K1} \\ C_{12} & \cdots & C_{K2} \\ \vdots & \ddots & \ddots \\ C_{1r_{1}} & \cdots & C_{Kr_{1}} \end{pmatrix} \quad C_{2} = \begin{pmatrix} C_{1,r_{1}+1} & \cdots & C_{K,r_{1}+1} \\ C_{1,r_{1}+2} & \cdots & C_{K,r_{1}+2} \\ \vdots & \ddots & \ddots & \vdots \\ C_{1,r_{2}} & \cdots & \cdots & C_{K,r_{2}} \end{pmatrix}$$

と置けば上の條件式は次の様に書ける。 $C_1 \mathfrak{A} = 0$, $C_2 \mathfrak{A} = 0$

更に適當な行列

$$C_{3} = \left(\begin{array}{c} C_{1,r_{2}+1} \cdots \cdots C_{K,r_{2}+1} \\ C_{1,r_{1}+2} \cdots \cdots C_{K,r_{2}+2} \\ \cdots \cdots \cdots \\ C_{1K} \cdots \cdots \cdots C_{KK} \end{array} \right)$$

を選んで新なる特異でない行列

$$C = \begin{pmatrix} C_1 \\ C_2 \\ C_2 \end{pmatrix}$$

を考へることが出來る。今 C $\mathbb{N}=\mathbb{N}'$, $\mathbb{N}'=(a_1', a_2', a_2', a_3')$ と置くと $\mathbb{N}=C^{-1}\mathbb{N}'$ であるから $\mathbb{N}=X\mathbb{N}+3$ なる關係式は $\mathbb{N}=XC^{-1}\mathbb{N}'+3$ なる形に書ける。從つて $XC^{-1}=X'$ と置くと $\mathbb{N}=X'\mathbb{N}'+3$ である。こくに

$$X' = \begin{pmatrix} x_{11}' \cdots x_{1K}' \\ x_{21}' \cdots x_{2K}' \\ \vdots \\ x_{n1}' \cdots x_{nK} \end{pmatrix}$$

今 观"=(a'_{r_1+1} , a'_{r_1+2} ,, $a\kappa'$),

成立する部分空間

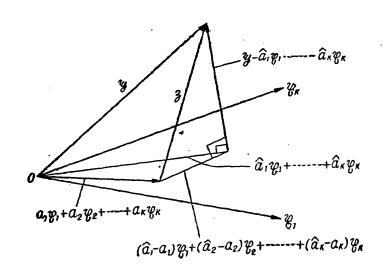
 $\mathfrak{Y}=X''\mathfrak{X}''+\mathfrak{Z}$ なる形になり第四節と全く同じ形で、ある。從つて此形式の下に假設 H_0 は次の様な形に書ける。

 Ω : $-\infty \langle a_p' \langle \infty, \sigma' \rangle 0$, $p=r_1+1$, ……, K ω : 段数空間 Ω の中で $a'r_1+1=\dots=a_r'=0$ が

故に此の假設は第四節の場合と全く同様に取扱へる。

VI. 幾何學的解釋

第三節の最初に述べた關係式は $\mathfrak{X}_{i=(x_{1i},x_{2i},\cdots,x_{ni})}$, $i=1,2,\cdots,K$ と置くと次の機な形にも書け

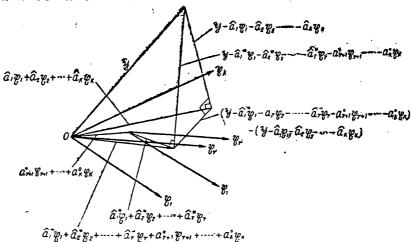


る。 $\mathfrak{Y}=a_1 \mathfrak{X}_1+a_2 \mathfrak{X}_2+\cdots\cdots+a_K \mathfrak{X}_K+\mathfrak{Z}_6$ 。この時長尤推 包値を求めることに幾何學的に解釋すると $\mathfrak{Y}=(y_1,y_2,\cdots\cdots,y_N)$ なる點より原點を通過する $\mathfrak{X}_1,\mathfrak{X}_2,\cdots\cdots$, \mathfrak{X}_K が作る課形空間に垂線を下した場合垂線の足に對する $\mathfrak{X}_1,\mathfrak{X}_2,\cdots\cdots$, \mathfrak{X}_K の係數 $\hat{a}_1,\hat{a}_2,\cdots\cdots$, \hat{a}_K を決める事に相當する。亦 \hat{a}^2 はこの垂線の距離

 $(\mathfrak{Y})=\hat{a}_1\mathfrak{X}_1-\hat{a}_2\mathfrak{X}_2\cdots\cdots\hat{a}_K\mathfrak{X}_K)^2$ に相當する。 医示すれば下葉の如くになる。

從つて $\{(\hat{a}_1 - \hat{a}_1) \chi_1 + (\hat{a}_2 - a_2) \chi_2 + \dots + (\hat{a}_K - a_K) \}$

 $\times \mathfrak{X}\mathfrak{X}$ と $\{ \mathfrak{Y} \} - \hat{a}_1 \, \mathfrak{X}_1 - \dots - \hat{a}_K \, \mathfrak{X}_K \}^2$ の獨立性は $(\hat{a}_1 - a_1) \, \mathfrak{X}_1 + (\hat{a}_2 - a_2) \, \mathfrak{X}_2 + \dots + (\hat{a}_K - a_K) \, \mathfrak{X}_K \}$ なる ベクトルと $(\mathfrak{Y} - \hat{a}_1 \, \mathfrak{X}_1 - \hat{a}_2 \, \mathfrak{X}_2 - \dots - \hat{a}_K \, \mathfrak{X}_K)$ なる クトルの直交性に相當する。これは以上の理論から容易に證明出來る。亦 $\{ (\hat{a}_1 - a_1) \, \mathfrak{X}_1 + (\hat{a}_2 - a_2) \, \mathfrak{X}_2 + \dots + (\hat{a}_K - a_K) \, \mathfrak{X}_K \}^2$ の自由度は $\dim \{ \mathfrak{X}_1, \, \mathfrak{X}_2, \, \dots , \, \mathfrak{X}_K \}$ に等しい。亦第三節の $\hat{e}_1^2 \, \geq \hat{e}_M^2 - \hat{e}_1^2 \,$ の優立性は幾何學の三垂線の定理に相當する。此を國で解釋すれば下憂の如くである。



Q なる條件の下で最七推定値を求める事は 別なる點より原料を通る $\chi_1, \chi_2, \dots, \chi_K$ が作る線形を間に垂線を下した場合垂線の足に對する $\chi_1, \chi_2, \dots, \chi_K$ の係數 $\hat{a}_1, \hat{a}_2, \dots, \hat{a}_K$ を決める事に相當する。 亦 $e^{\Omega z}$ はこの垂線の距離 $(\mathfrak{Y} - \hat{a}_1 \chi_1 - \hat{a}_2 \chi_2 - \dots - \hat{a}_K \chi_K)^z$ に相當する。同議に ω なる條件の下で最 尤推定値を決める事は \mathfrak{Y} より $\alpha^0_{r+1}\chi_{r+1} + \dots + \alpha^0_{r+1}\chi_{r}$ なる點を通る $\chi_1, \chi_2, \dots, \chi_r$ が作る線形 空間に垂線を下した場合、垂線の足に對する $\chi_1, \chi_2, \dots, \chi_r$ の係數 $\hat{a}_1^*, \hat{a}_2^*, \dots, \hat{a}_r^*$ を決める事に相當し、 $\alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_0 + 1 - \dots - \alpha^0_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_2^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_r^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_r^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_r^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \hat{a}_r^* \chi_2 - \dots - \hat{a}_r^* \chi_1 - \alpha_{r+1}\chi_1 - \alpha_{r+1$

 $q_2 = (\mathfrak{Y})\hat{a}_1 * \mathfrak{X}_1 - \hat{a}_2 * \mathfrak{X}_2 - \dots - \hat{a}_r * \mathfrak{X}_r - a_{r+1} \mathfrak{X}_{r+1}$

 $-\cdots-a^0\kappa \mathfrak{X}\kappa)-(\mathfrak{Y}-\hat{a}_1\mathfrak{A}_1-\hat{a}_2\mathfrak{X}_2-\cdots-\hat{a}_K\mathfrak{X}\kappa)$ なるベクトルの直交性に相當することは如上の談論により明らかである。この直交性はこのn 次元 空間の部分空間 $\{\mathfrak{X}_1,\mathfrak{X}_2,\cdots\cdots,\mathfrak{X}_K,\mathfrak{Y}\}$ に於ける三垂線の定理により容易に證明される。亦 q_1,g_2 の自由度は幾何學的に解釋すると夫々n-dim $\{\mathfrak{X}_1,\mathfrak{X}_2,\cdots\cdots,\mathfrak{X}_K\}$,dim $\{\mathfrak{X}_1,\mathfrak{X}_2,\cdots\cdots,\mathfrak{X}_K\}$ 、に等しいことも見易いことであらう。(以上)